第一セッション「アジアへの視点と言説」総括

蔵持重裕

立教大学日本学研究所主催の国際シンポジウム「日本学の現在と未来」はのべ二百名ほどの参加で盛況であった。ベンゾーニ氏の報告は「初期グローバリゼーションにおける西欧での日本像」と題したものであった。内容は特に十六世紀の宣教師等の報告が西欧の人々に日本のイメージを基底的に形成したとする。それはアジアのインド・中国、さらには南米、メキシコなどと比較して、日本は独立性の高い国との印象を植え付けたこと、また、その後の「鎖国」で頑固な態度を取った国と理解された、とした。この報告は南米をも視点に入れた点に特徴があるが、「布教の難度」での印象が支配的である点、特色がでていた。

なお、ベンゾーニ氏から希望があり、ミラノ大学と立教大学日本学研究所との交流、共同研究などの可能性を探ることになった。この点も本学の国際的研究活動にとって少なくない成果と言えよう。

上里隆史氏は「琉球王国と港市那覇の展開〜海域アジアからの視点〜」の報告で、十四世紀以降の琉球、琉球王国の歴史を概観しながら、琉球王国は那覇を港湾都市として展開する中で王国の統一を進めたことを指摘した。王国はあくまでも明との冊封・朝貢関係が前提であったが、しかしながら独自の外交姿勢を固持しあくまで、「我が物としての利用」・アプロプリアシオン（appropriation）であったと、まとめられた。

金炫栄氏は「北学論の再検討：朴斉家の「延平齠齡依母図」を中心として」と題する報告で、反清復明の象徴である羅聘が、同じく反清復明の英雄である鄭成功の幼少の姿を複写したことを取り上げ、ソウル周辺の北学派は中国からの帰国者などから日本の情報を得ていたことを明らかにした。それは伝統的な中国観、日本観への変化に影響を持ったと思われるが、しかし、北学は北伐のための北学であって、清の正当化をするものでは無いと、指摘された。

以上の各報告は、地域的には朝鮮、中国、西欧、南米と広域な目配りの中で論じられ、東アジアに偏りがちな「前近代の日本の国際関係」の見る目を広げたことに新鮮な成果があった。

同時に、各地域の人々と国家が、日本、日本列島のイメージを造る上で、所詮、自分たちの関心にしたがって、利便的に、引き付けて理解しようとする性向は免れないことも明らかになった。これはやはり情報が少ないこと、そもそも自らの関心で情報を収取していることにも大きく規定されているはずである。

我々の研究も、まず、情報の全量とその伝達の全貌を明らかにしていくことが引き続き課題であることを示すものとなった。